

元気の素

今井 七重

私達の滞在もそろそろ折り返し地点にさしかかります。今日は、これまでの滞在中に感じた諸々のこと

を書いてみます。

こちらに来てほどなく、私は、香港人の先生の自宅で、月に二回中華料理を習いはじめました。

一般的な家庭料理を習つたり、日本ではない、こ

ちらの珍しい食材の調理法を教えてもらつたりしながら、毎回四品、五品の料理を楽しんでいます。先生のデモンストレーションを見て、試食というパターンで、日本の料理教室のように実技がない点が多少不満ではあります。狭い香港でそれを期待することは無理です。事実、趣味の範囲で習う料理教室は、いずれもこの形態です。た

だ、暖め直して出されるレストランの料理とは違
い、私達のためだけに、その日の早朝、市場で買
い求めた新鮮な食材で調理しますので、味は格別
です。毎回、この日を指折り数えて待っているほ
どですが、理由は、単にその料理だけにあらず、
先生の人柄に触ることで、元気の素を分けても
らえるからです。

先生は、五十代半ばですが、ともかくパワフ
ル。いつも明るく前向きで、バイタリティにあふ
れています。数年前まで、日本人観光客や日本へ
の香港旅行者へのガイドをしていましたが、日本
への造詣も深く、当然のことながら、日本語もで
きます。北京語、広東語は、母国語ですし、英語
もこなします。しかし、それだけでは満足せず、
ここ数年は、フランス語の勉強に励んでいます。
通常お料理は、九時三十分より始まるのですが、
その前の八時三十分より、プライベートの الفرن

ス語レッスンを自宅で受けています。休みが二週
間ある年末には、フランスへ語学留学をし、午前
中は語学学校に通い、午後は、得意のお料理教室
に通い、一般家庭に滞在し、語学に磨きをかける
のだと意気込んでいます。先生には「もう、年だ
から」の言葉は、存在しません。感心する私達に
「日本人はいくら、時間とお金があつても私のよ
うに、一人で行動はできないでしょう」と岡星発
言をします。

先生のスケジュールを聞いてみると、一日をい
くつもの枠に分けているような気がします。午前
中、午後、夜の三つだけではなく、朝食前、午前
中、午後前半、午後後半、夕食後の五つです。フ
ランス語のレッスン受講後は、お料理を教え、午
後は、水泳仲間と水泳をしたり、大好きな社交ダ
ンスを習いに行ったり、夕食前は、広東語や北京
語を教え、夜は、来客をもてなす等という一日

は、日常茶飯事です。一つ予定が入るだけで、その一日がすべてそれを中心に回る私の、三、四日分を一日でこなしています。「日本人の奥さんは、香港の奥さんと違つて、働いていないのに、どうしてそんなに忙しがつているのだろう」と不思議がられます。時間の使い方及び精神力の違いでしょうか。

確かに、多くの香港人の奥さんは、一日働いていて、帰つてからも日本のように冷凍食品も充実していないので、ちゃんとお料理をしているようです。しかも、基本的に毎日買い物に行くのが普通です。その日に必要なものだけを、新鮮なものを売っている街市（ガイシ）と呼ばれるオープンマーケットに買いに行きます。最初に街市で見た所狭しとかごに入れられた、生きた鶏の哀れな鳴き声と、何かを訴えているような瞳に、卒倒しそうになつた私ですが、今では馴れました。でも、

未だ一羽買
う勇気はな
く、時折、

既にかごに
入った手羽
先二十本約
百五十円を



買う程度です。現地の人は絶対スーパーの鳥は、買わないといわれるだけあり、さすが、身がプリプリしていて、おいしいです。ところで、新鮮な鶏の見分けかたというのを教えてもらいました。首の部分をつかんで、筋が、少なければ、若い証拠、しっぽをつかんで、穴が小さければ、それだけ、卵を産んでいないので、やはり若い証拠になります。でもこの知識、私の場合、生かせそうにありません。

さて、香港は、前述したように共稼ぎが多いの

で、留守中の家事や子どもの世話を、アマと呼ばれるメイドにまかされます。アマのほとんどは、

フィリピン人ですが、インドネシア人、タイ人、ネパール人、スリランカ人もいます。フィリピン

人は、英語能力が高く子どもの教育ができる、学歴が高く学位がある者もいる、賢くて、適応能力が優れる等々の高い評価を得ています。通常、一緒に暮らすフルタイムの勤務形態ですが、パートタイム的にアマを利用する人も多く、日本人は、後者を選ぶ人が多いようです。ただ、日本人は一般的に人を使い慣れていないので、「今日は、アマさんが来るから、少し片づけなくっちゃ」という感じが多いようです。私も、少々贅沢ではあるものの、週に三回、各四時間フィリピンの方に来てもらっています。仕事をしてもらいながら、女同士、色々な話に花が咲きます。彼女を通じて、私は、日本の物質的な豊かさと精神的な豊かさ

が、必ずしも一致しない事実を改めて感じました。少し、彼女のことについて書きます。

香港に来て既に、八年というから、三十歳で、当時七歳と五歳の男の子を両親に預けて、国を離れることになります。彼女の場合は遅い方で、普通は高校を卒業して、すぐに、香港にやってくる人が多いです。まだ、幼げな女性が、雇い主の子どものお守りをしている姿をよく見かけます。香港・フィリピン間はわずか一時間の飛行時間なのにも拘わらず、フィリピンに帰るのは、二年間に一回一か月、もしくは一年に一回の二週間のいざれかです。母国では、大学を出ていても仕事がないことや、子どもの高額な学費を払うためには、家族の誰かが、国外で稼ぐ必要があるのです。男性の場合、庭師や運転手としての仕事はありますが、数が少ないため、やはり女性が家族の期待を背負って香港にやってきます。住み込みの場合

は、三畳程度の部屋を与えられるか、子供部屋を共有します。この場合は、ベッド二つおけるスペースはないので、彼女たちは、床に寝ます。

上手な英語を話すのに、彼女らにはそれをいかず知的仕事はなく、あるのは肉体労働のみです。

仕事の選り好みなどできません。家族の期待と生活がかかっているからです。寝る時間以外は、ずーっとお仕事という過酷な条件の下での唯一の

楽しみは、週一回のお休み（日曜日の場合が多い）に、公園で同郷のお友達とおしゃべりをして過ごすことです。それも雨が降れば、不可能になります。しかし、暗くはありません。「年をとつたら、国に帰つてゆつくりするから、今はいっぶり働きたい。だって、元気なのだから」と語り、誰をうらむでもなく、自分の境遇を必要以上に卑下するでもなく、淡々と仕事をこなすアマさんは言葉に、私は感動すら覚えます。日本では、女性誌に出てくる女子大生が、ブランドものを誇らしげに自慢しているというのに、同じ年頃のフィリピンの女性は、小さなバッグ一つで国を離れ。異国之地で働いています。集団就職なんて、日本では死語になりつつあるのに、アジアの国では、いまだ日常なのです。悲しいけれどこれが現実です。

香港が大好きだという人は、その理由を「香港に来ると、生きるパワーを分けてもらえるから」と言います。私は、その理由が、料理の先生との出会いや、真剣に日々を生きているアマさんの姿から、なんだかわかるようになつたこの頃です。

（元幼稚園児の母・香港在住）

自分の中でもそうやってきたのだから」と語り、誰をうらむでもなく、自分の境遇を必要以上に卑下するでもなく、淡々と仕事をこなすアマさ